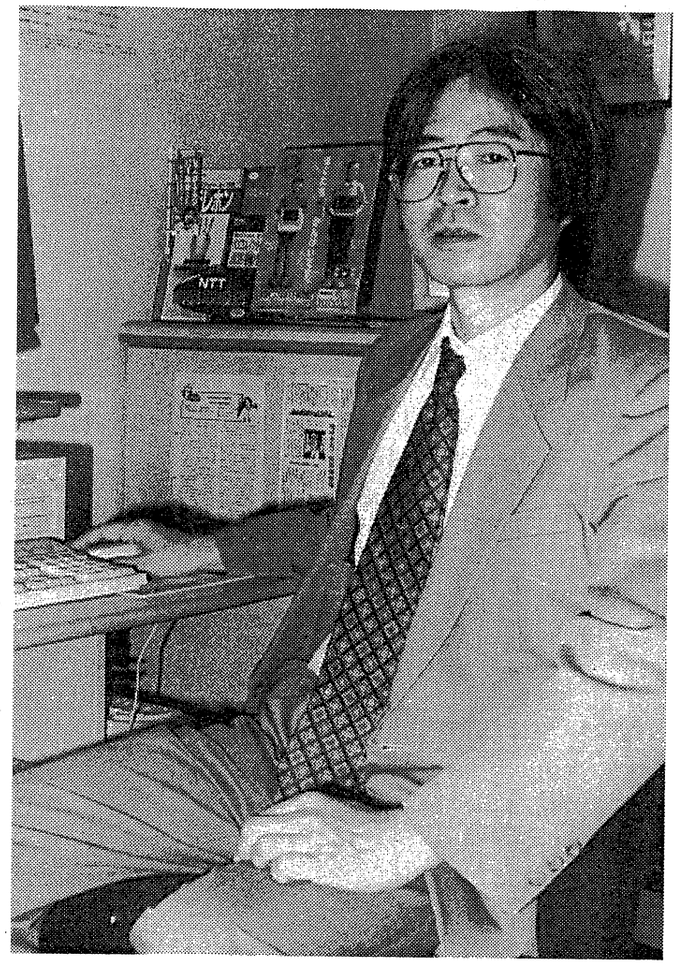
（第3種郵便物認可）　1998.9.29　東京新聞

トーク

災害に即インターネット

那須インフォネット社長 河内賢二さん

県北部が記録的な集中豪雨に襲われてから一カ月が過ぎた。当時、電話回線が不通になるなど通信網が寸断される中、予想外に活躍したのはインターネットの地元プロバイダー「那須インフォネット」（河内賢二社長）＝黒磯市末広町＝が運営する災害情報の掲示板だった。テレビやラジオのマクロ的な災害情報の一方で、地元住民や親類の安否を気遣う人たちの不安を和らげるようなきめ細かい情報を連日フォローし続けた。災害時にインターネットが実力を発揮することを証明してみせた河内社長は「情報ボランティア」の心意気にあふれていた。



河内　賢二（かわち・けんじ）　1953年2月、福岡県生まれ。中央電気通信学園大学部卒業後、NTT、DDIを経て96年8月にインターネット・プロバイダー「那須インフォネット」を設立。DDI時代に初めてインターネットに触れ、その便利さを実感したことがきっかけ。前身は4年前に黒磯市に移り住んだ直後にボランティアで始めたパソコンネット（BBS）。以来、インターネットを駆使し、県北地方の活性化に努めている。

――ホームページに集中豪雨関係の掲示板を開設したきっかけは何でしたか。

◆豪雨が本格化した八月二十七日に、当社のホームページのウェブ会議室に「地元住民が情報を共有する手段はないか」という投稿があったんです。何より、電話がつながらなくなった。連絡が取れなくなると、人は不安を感じるんですよ。自分も経験があるんです。かつて娘が交通事故に遭った時、家から会社に電話があったんですが、たまたま不在で、後で家に電話をかけたんですが、妻が出かけてもう連絡が取れなかった。だから、今回もみんなインターネットに情報を求めてくるな、と思いました。即日に立ち上げました。

――開設に先立ってどんな準備をしたんですか。

◆最初は情報提供の場だけ作って、行政側に情報提供してもらおうと思いました。それで、那須町役場、黒磯市役所、大田原市役所、西那須野町役場、塩原町役場にメールを出してお願いしたんです。家族や親族の安否を気遣っている人たちがたくさんいるから、避難した人や各地区の被害の詳細、そして地元住民への道路情報を提供してくれないかと。

――ただ、行政側はそれどころじゃありませんでした。

◆行政側は被災地の救助に精いっぱいだった。もちろん、それが一番大事なんですが、人手の十分の一でも百分の一でもいいから、きめ細かい情報提供に割いてくれたら、と思いました。「ここの地区の住民はあそこに避難しています」といった情報を流せないものですかねえ。

――結局、行政になり代わって情報を集めたのが河内さんでした。

◆運営は一人でやりましたけど、会員の方にメールで協力を呼びかけたんです。そしたら、予想以上に生の情報が集まりました。特に道路情報は有益でした。自分が通ってきた道路について大丈夫かどうか、冠水しているかどうかなどすぐにリアルタイムの書き込みがありました。

――アクセスも予想以上に殺到したようですね。

◆最終的には一万件までいったんじゃないんでしょうか。まだ、開設してますけどね。ピーク時で一日二千件はあったかな。米国からもアクセスがありました。留学している人が「両親が黒磯市の深山ダム近くの幸の湯温泉に旅行に出かけているのですが、その地区は大丈夫ですか」と問い合わせてきたんです。だから、実際、私がそこに行って「大丈夫です。心配ありません」と返事を出しました。

――反響も大きかったようですね。

◆やっぱり、みんな「助かった」って言ってます。道路情報なんかね。「そちらの橋はだめで、あちらの橋は通れますと」なんていうちょっとした情報があれば、全然違うと思うんです。あと、KDDの国際電話の時に使う「001」をダイヤルすれば、不通だった電話がつながることを思いついて紹介した時も、ものすごい反響がありました。

――運営にあたって、苦労も相当ありましたでしょう。

◆八月二十日の間に、一日一時間くらいしか寝なかった。あとはくるまって泊まりこんだ。かく雷がすごくてカーが何回もダウンしてね。会社を無人になるかもしれなかった。

――今回の水害でも県内外からボランティアが被災地にかけつけてもいいと思いますが、その中の一人として、ボランティア団体を取材した時に代表者が印象的なことを言った。「行政は腰が重いのは当然。組織が大きいんだから。不測の事態が起こった時、一番素早く対応できるのはボランティアしかない」

今回の水害でも県内外から大勢のボランティアが被災地を訪れ、かいがいしく汗を流した。河内さんもその中の一人と言っていい。

インタビューを終えて

那須・黒磯の電話が不通になってインターネットが使えたのは、殺到した河内さんのホームページを目の当たりにしたこそだった。かなりっているが、一つのないものに対して

――今回について何かお考えは？

◆私がやっぱり、今後は行政に考えてもらったりもしますけど、ないことにしてもらうには役場に、同じようなことがないかなあ。とれないでしょうか。ターネットに情報を加えて、災害時にきればと思っています。でもわれわれの方が有益だったなたたち行政の方を私たちが代わりますから」と思いますね。

（聞き手・佐藤　正）